

現場からの報告

「学ぶ」ということ

山口 毅

彼は今から十年ほど前に本校を卒業した生徒である。国立大
学法学部を卒業後同大学院を修了、そのまま大学に残り、末弘
敏太郎創刊の『法律時報』に論文が掲載されるなど、若手法学
者として活躍している卒業生の一人である。その彼から一通の
手紙を受け取ったのは五月下旬であった。久闊を叙した後、彼
は突然次のように言う。

『鼓腹撃壤』の解釈に関する管見」と題して、「高等学校時
代の漢文の時間、先生にご教示いただいた解釈について疑問を
抱くに至りましたので、以下それについて説明いたします。こ
れを契機にさらなるご批判、ご教示に接することができれば光
栄です。」と述べ、卒業後もずっとこの語句の解釈に疑念を抱い
ていたと言うのである。すなわち「老人があつて、口に食物を
含みながら、腹鼓をポンポコとうち、地面をドタドタと足で踏
みならず」という解釈が「太平の世」をあらわすとは常識では
考えられないと言ひ、「老人があつて、口に食物を含みながら
腹も膨れたので、さてひとつ撃壤でもするかと道に出てきた」
という解釈こそがまさしく妥当ではないかと問ひかけてきたの
である。十年も前の授業の解釈が彼の体内に鉛のように沈んで
いて、それが時折疼くらしい。

それから約一ヶ月間、私は彼から五度にわたり部厚い封書
を受け取ることになる。「撃壤」は「地面を叩く」のではなく
「壤」という遊具を打つという意味の語であり、それは一九六
五年長沙の漢王墓から実物が出土したことで証明できること。

「鼓腹」は様々な解釈ができるが、荘子の馬蹄編の「含哺而熙
鼓腹而遊」を引用し、「ポンポコと腹鼓を打つ」のではなく
「太鼓のように腹を突き出して」と考えることができる。中
国から来日している李教授との話し合いの過程で確信したこと。
岩波ジュニア新書「四字熟語集」の著者のお一人和田武司氏に
直接手紙を書き、質問したところ、通説を覆すことはできぬま
でも、彼の解釈は十分納得できるという返事を受け取ったこと。
むしろ今までの漢学者の通説に胡座をかいている怠慢を認めざ
るを得ないという一文が添えられていたことなどを書いた手紙
が、膨大な資料とともに送られてきたのである。それらに目を
通しながら、私は彼の抱いていた疑問が次々に解明されていく
醍醐味を共有し、久しぶりに心が躍った。

彼は常々「国語学に関して、法解釈学同様に真理は「発見」
されるべきものではなく、対話（議論）という手続きの中で徐
々に「形成」されてゆくべきものだと思う。」と言う。彼のこ
うした真理探究の態度こそ「学ぶ」ということの真骨頂とい
うのだろう。

教育の現場では高校三年間だけのつき合いだけでなく、卒業
後のこうした交信が意外に多いものである。

（山梨県立富士河口湖高等学校）

文法指導雑感

次城 健

先日、国語科の同僚数人と雑談している折、その一人が「古典の時間に文法はなるべくふれないで『中味』に迫るべきだ。」といった話をした。私は顔は笑っていたが、内心、「何を素人くさいことを。」と思って少々あきれれていた。

彼がそんなことを言い出す気持ちは「同僚」としてとてもよくわかる。だから私は彼に対しては「同僚」としてあまり批判がましいことは言えない。私が言わなくても、ちゃんと批判なさる「先輩」がいることもあるが。

まあその「先輩」も極端で、「一年のうちに『活用表』を丸暗記させなくてはいけません。」といった調子で、バリバリ生徒をしめつけ、小テスト、追試、追試とせめてたてる。こんな人にあおられれば、「文法教えなきゃあとかわい。」と思うか、いやんなっちゃうかどちらかだろう。この「先輩」の一年生一学期の中間調査の問題は、教科書に出てくる文章の動詞に傍線をひいて、「活用の種類と活用形を書け」などというのが山ほど出る。時にはまだ「習って」いない助動詞の接続を知らないとかわからない活用形まできいてしまう。生徒もよく耐えているものだ。

さてそう言う、私自身はどうなのかといえ、実はどっちつ

かず、というか、「文法」についてそう大した「信念」もない。まあささやかな「生活の知恵」がある程度である。

古文学習の重点を「鑑賞」におくにしても古文の「文章」を「鑑賞」するものである以上は、古語によって表されている古文を正しく読めなくてはならない。そのためには、「文法」を知らないわけにはいくまい。だいたい活用の基本くらい知らなければ辞書だって引けないだろう。

一方やみくもに「活用表」の暗記を強いるのは、従順で勤勉な人間を育てるかもしれないが、古文嫌いもそれ相応に育てるだろう。

私の「生活の知恵」は、文法は生徒の学習の進み具合に合わせて扱うというだけのことだ。

一年では、一応「文法の副読本」は一通り目を通す。二年くらいまでは、「文法」を使って「鑑賞」をすすめて、できれば生徒が自力で「読める」ようになるよう努力させる。この学習の進展の様子を見て、生徒が「文法は使える」と思ってくれたころに、「活用」やら「助動詞」を一週間から二週間で丸暗記させる。(今までの経験では二年後半から三年一学期のある時点で年度によって少しずつれる) その後は「文法」を使った現代語訳を全員に予習として課しておいて授業に入る。こんな調子である。これも実はある「先輩」の受け売りだが、比較的無理のない方法と思う。

「信念」も大切だろうが、現実の生徒を忘れず、あきらめず、おしつけすぎず、遠い目標を目指して一步一步生徒と歩く者になりたいと思っている。

(東京都立松が谷高等学校)

現場からの報告

おもろい国語を目指して

山村文人

「先生、なんかおもろい話してや。」
おもろい、とはもちろん大阪弁で面白いの意味である。面白い話を聞かせてくれという生徒の要求は実に強い。高校の教師になって丸五年が過ぎようとしているが、その間ずっと感じ続けたのはこの、生徒の面白い話を聞かせてくれという無言の、あるいははっきりと口にだされた要求であり、願望である。授業内容が面白ければそれにこしたことはないが、そうでなくても、身のまわりの出来事のようなことであってもかまわない、とにかく面白い話が聞きたいというのである。

生徒に聞いてみると、国語の教科書に載っている話（古典の随筆であろうと、日本文化の特質といった評論文であろうと、詩、小説の類であろうと、生徒にとっては等しく「話」である）というものはあまり面白くないらしい。この場合、面白くないというのは、教材そのものが面白くないという場合と、教師の教え方、語り口が面白くないという場合の二通りが考えられるが、ここで問題にしたいのは、後者の方である。

教師になりたての頃、生徒が退屈そうな顔をして義理でこちらを向いているという風情がひどく苦痛であった。最初の一年間くらいは、その退屈そうな顔や生徒の無反応との悪戦苦闘で

あったような気がする。授業の前の晩、次の日に教科書の本文のどこの箇所をどんな風に話すかを必死になって考える。時には雑談を用意する。しかし多くの場合、唐突にそして緊張しながら語られたそれらの言葉を生徒達はきょとんとした顔をして聞いていたように思う。それらの事情は五年たった今でも大して変わってはいないのだが、多少こちらの神経が太くなったせいか、面白くなくてもかまうものかとどんどん授業を進めてしまっただけのことである。

巧い落語を聞いていると、本当にどうでもいいような些細なこと（例えば、道を歩いていると向こうから誰かがやって来たというような）を、実に楽しそうにおかしく話すので感心してしまう。それらの語り口というものは平易な言葉でありながら、それでいて奥行があつて、聞き手の想像力を刺激する。話の内容よりもその語り口の中にえも言われぬおかしさがあるのである。達人の言葉というものは話し手と聞き手の間にあって独自の命を孕むものらしい。小説の授業などをしてしていると、主人公の心情を味わおうなどと言う一方で、近代的自我、不条理、デカダンスといった難解な抽象語でテーマを解説して終わり、というようなことをつい、やってしまう。これは何とも矛盾したことである。平易な言葉で語りながら、それでいて話し手の個性が滲み出るような話、語り口というのが理想であろうが、これは大変に困難な課題ではある。斬家の名人芸を盗もうなどというだいたいそれは毛頭考えていないが、国語の教師はもっと寄席や芝居に通つてもよい、テレビのお笑い番組からでも多く学べると、最近よく思う。

（大阪府立狭山高等学校）